



# 長倉三郎先生と学術政策

Makoto FUJIWARA 藤原 誠 文部科学事務次官

長倉三郎先生のご逝去に衷心からお悔やみを申し上げます。

私が申し上げるまでもなく、長倉三郎先生は我が国の化学研究の第一人者として、東京大学物性研究所などにおいて研究と後継者育成に当たられ、その研究業績により朝日賞や日本学士院賞など多くの学術賞をご受賞なさいますとともに、昭和60(1985)年には文化功労者に選ばれ、平成2(1990)年には文化勲章をお受けになりました。このような大きな研究上のご業績は、長倉先生を研究者にとどまることを許さず、日本化学会会長として学会のおとりまとめをなさったり、岡崎国立共同研究機構長、総合研究大学院大学の初代学長、そして第23代日本学士院長として、大学共同利用機関や大学、我が国の研究者コミュニティの運営とその発展にご尽力なさったりと学術界全体への大きな貢献へと導きました。特に、昭和55(1980)年度には325億円だった科研費が平成8(1996)年度には1000億円を超え、現在2377億円(令和3(2021)年度)に達するに至っているその抜本的な拡充、分子科学研究所の設立や全国に分散した大学共同利用機関等を活かして分野を融合・総合した研究を行う総合研究大学院大学の建学において長倉先生が果たされた主導的な役割は、本当に大きなものでした。

私自身は平成7(1995)年に当時の文部省学術国際局学術課の課長補佐をしておりました頃、長倉先生に親しくご指導を賜りました。長倉先生は当時、学術審議会に置かれた学術研究体制特別委員会の委員長をなさっており、同委員会では大学等におけるCOEの構築についての方向性をとりまとめた上で、若手研究者の養成や人文・社会科学分野の研究の在り方について議論が重ねられていました。

担当課長補佐として長倉先生にご指導いただくなかで、科学技術とは異なる「学術」の意味や価値、特性を深く認識することができたのは大変得がたい貴重な

ことでした。長倉先生から、学術研究にとって大事なものは自由な発想に基づく挑戦と研究の裾野の広さであり、そのためには若手研究者を育てることや人文・社会科学を含めた学術の総合性・融合性が何よりも必要であるとお教えいただいたことは、強い確信として今も持ち続けています。また、当時の学術国際局には宮嶋和男、北尾善信、木下眞の各氏といった研究者と伴走しながら学術研究の推進に全力を尽くすベテランの「学術官僚」が揃っていました。長倉先生にご指導いただきながら、研究者をしっかりとお支えしようという意欲にあふれていた四半世紀前の学術国際局に今改めて思いをいたしております。

その後、平成13(2001)年の省庁再編で「文部科学省」が誕生し、内閣府の総合科学技術・イノベーション会議では長倉先生門下生の物質・材料研究機構理事長の橋本和仁先生が有識者議員として活躍なさっています。霞が関の組織は大きく変化いたしました。自由な発想に基づく挑戦と研究の裾野の広さが我が国の研究力にとって最も重要であるとの確信には全く変わりはなく、大学院博士課程の学生や若手研究者への支援、科研費やWPI、創発的研究支援事業などによる学際・融合分野の研究の推進などに取り組んでおります。特に、今年、10兆円規模の「大学ファンド」を創設し、その運用益で研究大学や博士課程学生への支援を行うというこれまでにない仕組みを設けたことは、大きな前進です。また、本年10月から研究振興局において大学における研究や研究大学の支援を行うことになりました。かつての学術国際局のように研究者と伴走する「学術官僚」を再び育成しなければならないと思っています。

長倉先生が学術政策において果たしてこられた大きな役割に深く感謝いたしますとともに、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

© 2021 The Chemical Society of Japan